2023 年 2 月 16 日
公益社団法人日本建築家協会
表彰委員会

2022 年度第 34 回 JIA 新人賞 受賞決定のお知らせ

2022 年度第 34 回 JIA 新人賞受賞者をお知らせいたします。受賞者詳細は、添付書面にてご確認下さい。

受賞者	所属	作品名
畑友洋（はたともひろ）	畑友洋建築設計事務所（はたともひろけんちくせっけいじむしょ）	甲陽園の家（こうようえんのいえ）
千葉元生（ちばもとお） 山道拓人（さんどうたくと）	ツバメアーキテクツ	BONUS TRACK（ぼーなす とらっく）

（応募登録順）

※2022 年度 JIA 新人賞は、2017 年 1 月 1 日より 2021 年 12 月末日（5 ヶ年）までに日本国内で竣工した建築作品を対象とし、審査が行われました。

・審査委員
高橋晶子氏、難波和彦氏、原田真宏氏

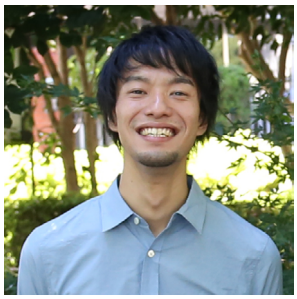
・実施状況につきまして
2022 年 9 月 30 日（金） 応募締切
2022 年 10 月 28 日（金）第 1 次審査会にて応募作品 93 点の中から 10 点を選出。
2022 年 11 月 20 日（日）第 2 次審査会（WEB 配信による公開審査）にて候補者によるプレゼンテーション及び質疑応答を行い、現地審査対象作品 4 点を選出。
2022 年 12 月~翌年 1 月 現地審査実施。
2023 年 1 月 18 日（水） 最終協議を経て、上記受賞者を決定。

「甲陽園の家」（コウヨウエンノイエ）
畑友洋（ハタトモヒロ）/畑友洋建築設計事務所

1978 年　兵庫県生まれ
2001 年　京都大学工学部建築学科卒業
2003 年　京都大学大学院工学研究科修了
2003 年　高松伸建築設計事務所入社（-2004）
2005 年　畑友洋建築設計事務所設立
現在、神戸芸術工科大学准教授、京都大学非常勤講師

西宮市甲陽園にある住宅である。周囲は複雑な擁壁と、つづら折れの道が絡み合い、その中に生活が編み込まれているような環境である。敷地に至る道幅は狭く建材の運搬もままならない。そこで、人の手で運び組み立てられる方法として、小さなピースの組合せでスパンを飛ばすかたちとしてアーチに着目し、二枚を一組とする LVL 材による小さなピースを組み合わせることで生まれる組木アーチの仕組みを考案した。この組木アーチを互いに背中合わせにもたせ合い、十字形状をした柱型に組み合わせることで連続する架構の仕組みへと展開させた。
この架構における屋根は、十字柱のアーチのグリッドから 45 度斜行した向きにヴォールト状に連続させることで、十字柱の直行座標と斜行するヴォールトの座標という異なる 2 つの座標が天地で重なることで生まれる空間の多軸性を生み出すことを意図した。それは小さな部材の組立てで、伸びやかな空間を生み出す単純な架構の形式が周囲のつづら折れの道の流れに呼応する多軸的な座標となり、住まいの物理的な空間の枠を超え、認識における空間を多軸的な街の広がりの中に拡張しようとする試みである。

「BONUS TRACK」(ボーナストラック)
ツバメアーキテクツ / 千葉元生 + 山道拓人



千葉 元生 (チバ モトオ)
1986　千葉県生まれ
2009　東京工業大学工学部建築学科卒業
2009~2010　スイス連邦工科大学 ETH
2012　東京工業大学大学院 理工学研究科建築学専攻 修士課程修了
2013　ツバメアーキテクツ設立
2021~　東京大学非常勤講師

山道 拓人 (サンドウ タクト)
1986　東京都生まれ
2009　東京工業大学工学部建築学科卒業
2011　同大学大学院 理工学研究科建築学専攻 修士課程修了
2011~2018　同大学 博士課程単位取得満期退学
2012　ELEMENTAL(同大学大学院 派遣プロジェクトとして)
2012~2013　Tsukuruba Inc. チーフアーキテクト
2013　ツバメアーキテクツ設立
2021~　法政大学 専任講師 / 江戸東京研究センター プロジェクトリーダー

© 山岸 剛

© morinakayasuaki

地下化した小田急線の線路跡地に建つ BONUS TRACK(設計 : 千葉元生 + 山道拓人 + 西川日満里) は、個人が小商いを始めやすい環境を生み出すことで、下北沢の街並みを引き継ぐ新築の商店街をつくる計画である。
全体は、東西約 4m の高低差を緩やかに繋ぐ世田谷区の通路に沿って、4 棟の兼用住宅（SOHO 棟）と、1 棟の商業施設（中央棟）が、広場を内包しつつ路地をつくるように建つことで概ね構成されている。個人が店舗を持続して構えやすいように、一区画 10 坪（1 階店舗 5 坪、2 階住戸 5 坪）の兼用住宅を基本単位として設定し、SOHO 棟のうち 3 棟を、この区画を三つ連ねた長屋とした。もう 1 棟の SOHO 棟と中央棟には、シェアキッチン、シェアオフィス、共用ギャラリー、トイレ、ゴミ置場など、区画の小さな店舗をサポートする機能を持たせている。これらに囲まれた広場には、在来種の緑を多く植え、面積の小さな内部空間を補完する共用の庭として、また、近隣の人にとっては公園のような場所として使えるようにした。
それぞれの建築は、片流れ屋根の組み合せによる外形や分節された外壁、軸組み現しの内部空間など、完結的で独立性の高いものではなく、まだまだ手を加えられる雰囲気を残した。また、仕上げを変えられる外壁や庇、コンクリートのカウンターなど、手を加えられるエレメントを全体に散りばめた。その上で、内装監理という立場で、どのような改変方法があり得るかを明確化し、入居者に示すことで、積極的に手を加えていってもらうよう促した。
下北沢の街並みを引き継ぐと言ったときの下北沢らしさとは、住民や店主が思い思いに自らの住み、商う環境を整えていった結果の蓄積によって、創発的に形成されてきたものであると思う。ここでも、入居者の主体性を喚起するような建築と仕組みづくりによって、入居者自身が手を加え続け、断続的に育てていける街のあり方を目指した。